

親鸞仏教センター通信

 2005.
June

第14号

2005年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

連帯するいのち

親鸞仏教センター研究員 伊 東 恵 深

もう1年近く前のことであるが、16年余り共に暮らした猫が死んだ。私が小学生のときに近くの公民館で拾ってきて以来、家族の一員として、まるで兄妹のように生活を共にしてきた。その死に際して、私たちは、^{こんぎよう}勤行を行い、手製の小さな棺に納め、埋葬することによって、その生涯に別れを告げた。

この経験を通して、ひとつ気づかされたことがある。それは、たとえ「死」によって大切な存在を失ったとしても、いのちの根源において互いにつながっているという感覚によって、本来のつながりは失われてはいない、ということであった。長年、可愛がってきた猫との死別という深い悲しみのなかにありながらも、不思議と平静な私がいたのは、その猫の存在は、私のなかに確かに生きているという実感を通して、いまなお生き続けているからである。

昨年末、アメリカのベンチャー企業が、死んだ猫のクローンを誕生させたというニュースが話題となった(2004年12月23日、共同通信)。私たちにとって、愛するものと別れなければならない悲しみはまことに深く、かけがえのない存在をどうにかして取り戻したいという欲求はきわめて強い。しかし、このような生命操作によって作り出されたいのちは、私たち人間の欲望の産物であって、人間の執着・愛着^{しゅうじやく あいじやく}によって私有化されたいのちに他ならない。はたしてそこに、いのち本来のあたたかいつながりを感じることができるであろうか。

また、例えば昨今の、青少年による殺傷事件やリストカットなどの自傷行為が多発する背景には、躍動するいのちの実感を求めつつも、閉塞した孤独の闇を生きざるを得ないという痛ましい現実があるのだろう。それは単に、学校教育の見直しや家庭環境の改善だけでは解決されない深刻な問題である。

このような現代にあって、いま私はあらためて、清沢満之が^{ばんぶついつたい}「万物一体の真理は、吾人^{こじん}がこれを覚知せざる間も、常に吾人の上に活動しつつあるなり」(「万物一体」)と明記されたことの意義を憶うのである。清沢は、あらゆる存在は相互に関係しながら成り立っており、関係を離れて個別に独立するものではない、と言う。そしてこの真理は、私たちが気づかない間も、私たち自身の上に常にはたらきかけていると述べている。この清沢の言葉は、私たちの思いに先立って、すでに連帯するいのちがあることを教えるものであり、この事実が目覚めることこそが切望されているのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土^{じよく}—濁世^せを超えて、濁世に立つ—」 本願の信心—矛盾のままにたすかる

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第35回と第36回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第35回は、『浄土論』の「大衆功德」について、第36回は、「上首功德」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第35回の問題提起からその一部を紹介する。

(越部良一)

■ 矛盾を生き、矛盾を破る論理

今日、親鸞仏教センターで、清沢満之先生の書かれたものを学ぶ研究会をやっておりました。清沢先生は、「無限」と「有限」という概念を立て、無限と有限というものは矛盾する。つまり、有限は無限ではない。無限は有限ではない。けれど、無限というからには、有限が外側にあるはずがない。全部の有限を包んでいなければ無限とは言えない。しかし、有限が無限のなかにあるのだったら、有限と言えるのか。そういう矛盾がある。

有限と無限は矛盾なのだけれども、事実として一致するということがないならば、仏教は成り立たない。そういうことを語ろうとする。そうすると語れないのです。矛盾しているのだから、言おうとすれば比喩でしか語れない。けれど事実は、矛盾を超えて生きている生命がある。そういうことを何とか語り抜こうとしているのだけれど、読んででもさっぱりわからない。無限は無限、有限は有限、とわれわれは思っていますから。だけど、有限は本当は無限なのだ、無限は本当は有限なのだ。

善導大師に、「弥陀の智願海」（『往生礼讃』『教行信証』「行巻」に引用。『真宗聖典』174頁）という言葉があって、その「願海」ということと言うなら、願海の外に衆生はいない。どんな衆生も願海のなかにある。願海が浄土である。願海が浄土であるなら、どんな衆生も浄土の外にはいない。ところが、われわれは、浄土というようなものでない穢土のなかで、比喩的に言うなら、傘もないのに土砂降りの生命を生きている。では、どこに浄土があるのか。でも、願海からすれば、どこであろうと浄土のなかである。これは矛盾するわけです。

人間の考えからすると、いまの世界にないから、どこかにあると。無限を有限の外側に立てるしかない。外側に立てた無限には、無限の距離があり、無限の時間がかかり、有限からは絶対にいけない。有限の努力をいくら積み重ねても有限だから、無限にはならない。けれど、そこに無限が有限にはたらく。無限に背こうとも、無限に反逆しようとも、無限と別なる有限はないというのが大悲ですから。

そうすると、浄土の衆生と言うけれど、それは実はわれわれなのだ。この愚かで罪深い心の暗いわれわれが、一切の河を飲み込んで、海の水にするような願海の大きなはたらきを感じるならば、本願のはたらきのなかに自分を見いだすならば、浄土の衆生のなかにいるのであると。

ではもう、浄土に生まれたのかということ、そこが難しいところです。われわれは、凡夫の生命を生きている。そのことは止められない。煩惱のいのちであることを忘れてはいけません。

から、もう浄土に入ったとは絶対に言わない。煩惱のいのちでありながら、浄土の功德をいただく。矛盾しているわけです。矛盾しているけれど、そこに「南無阿弥陀仏」が願海のはたらきとして来るのだと。こう信じて、苦悩のいのちを転じて、海のはたらきを感じずる場としてくれる。そういう、転ずるはたらきを感じながら生きることが信心なのです。

本願のはたらきを信ずれば、矛盾は矛盾のままに破られていく。だけど、矛盾がないとは言わない。やはり矛盾なのです。そういう矛盾を生きていく論理が、信心の仏法だろうと思うのです。まあ、大変難しいと言えば難しいのですが、本願を信ずるということは、そういう意味をもっているわけです。

■ 悲しい事実があって、しかし嬉しい

親鸞聖人は、徹底的に言葉と論理を大事にされるのですが、単なる論理ではない。やはり論理を尽くしながら、論理でいくところまでいって、それを超えて、矛盾を超えるような体験を与えようというところがある。

それに触れないで、矛盾のままに理解しようとする、凡夫で穢土に生きているのだから、浄土に生まれないのだから、功德がないのだから、死んでから後だ、と言わざるを得ないのです。愚かな凡夫であるから、浄土の功德が来るはずがない、浄土の功德は死んでからだと。そういうふう言葉にいただいてしまう。それは、どこかで本願を自分の外に置いているからです。死後の浄土などと言っているのでは、親鸞聖人の思想の大事なところを消してしまっているのではないかと思います。

一面、そういうふう、死後というかたちで表現しなければならない課題は、生きている間は、いわば泥田に足があるからです。けれども、本質はどこにあるかと言えば、泥田のままにたすかる、ということを言いたいのでしょう。泥田にいるから、お前は穢土だ、死んでからたすけてあげようなどと、親鸞聖人がおっしゃるはずがない。それは本末転倒です。つま

り、一番大事なところを読まないで、言葉の端だけを掴まえてきて、やはり、死後往生を言っていると。そんなことを鬼の首を取ったように言う人がいるのですけれど、親鸞聖人が、そのために、こんなに苦勞してものを書くのでしょうか。何のために書いているのかということなのです。

それは、愚かな凡夫がたすかる道を与えたいと。苦悩のいのちがどれだけ汚^{きた}かろうと、どれだけつらかろうと、そこにすでにたすかる道が与えられているからでしょう。だから、鈴木大拙先生が、「行」を“Living”と訳すのは、よくわかるのです。本願に触れて生きているのだと。本当に念仏が生きていれば、そこに救いがあるのだと。そういうことを、親鸞聖人は言い続けておられます。

ただ間違っはいけないのは、だから俺が仏に成ったとか、何か、そういう偉い様になる論理ではないのです。泥田に生きていることは変わらない。凡夫であることは変わらない。「悲しきかな、愚^ぐ禿^{とく}鸞^{らん}」（『教行信証』『信巻』『聖典』251頁）という、その事実は少しも変わらない。にもかかわらずというのが、大事なのです。だから、讀^{きん}嘆^{たん}と懺悔^{さんげ}が一つになっていると言われるのです。悲しみがあって、悲しみが無くなるのではない。悲しいのだ。悲しい事実がある。しかし嬉しい。だから、矛盾のままにたすかるということを明らかにしようと、一生ご苦勞された。これが、親鸞聖人の本願の信心のすごいところだと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2005年6月20日(月)午後6時30分～9時

7月 1日(金) 同上

8月18日(木) 同上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

きひとのためなり、その宗、あさしいやしというとも、さらにあらそわずして、われらがごとく下根の凡夫、一文不通のものの、信ずればたすかるよし、うけたまわりて信じそうらえば、さらに上根のひとのためにはいやしくとも、われらがためには、最上の法にてまします。たとい自余の教法はすぐれたりとも、みずからがためには器量およばざれば、つとめがたし。

われもひと、生死をはなれんところ、諸仏の御本意にておわしませば、御さまたげあるべからずとて、にくい気せずは、たれのひとかありて、あたをなすべきや。かつは、「評論のところにはもろもろの煩惱おこる、智者遠離すべき」よしの証文そうろうにこそ。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

のだ、その教義は、浅薄で低劣だ」と非難したとしても、まったく言い争わないで、「私たちのような、自らの力では仏に成れない、愚かな、そして文字ひとつの意味も領解できないものでも、信ずることによつてたすかる教えだと、聞かせていただいて信じているのだから、自らの力で仏に成れると思つて、いる優秀なひとには、取るに足らない教えであっても、私たちにとつては最上の教えなのである。たとえ、念仏以外の教えが優れていたとしても、自分の能力にびつたりこないもので、その教えを生きることはできない。

自他ともにあらゆる人びとが、迷い苦しみに満ちた生活から解放されることこそが、すべての仏の究極的な願いであるのだから、どうか念仏者の邪魔をしないように」と言つて、私たちがことさらに逆らわなければ、どのような人間が、敵意をあらわすだろうか。そのうえ、「論争をすると、さまざまの煩惱が起こる。だから、知恵あるものは、それから遠ざからねばならない」という、確かな教えの言葉もあるのである。

(訳：親鸞仏教センター)



『an'jali』第6号および

『現代と親鸞』第8号を刊行

このたび、情報誌『an'jali』第9号(写真上)、並びに研究誌『現代と親鸞』第8号(写真下)を刊行しました。

『an'jali』第9号では、慶應義塾大学理工学部教授の星元紀氏、東京大学大学院教授の鬼頭秀一氏、千葉商科大学教授の金元重氏、東京大学文学部助教授の熊野純彦氏、佐藤第二病院医師の田畑正久氏、東洋文庫理事長の斯波義信氏、詩人の宗左近氏、元高校教師の水谷修氏、トラベルライターの数本竹雄氏など、10名の専門分野の方々に、現代社会・現代人の諸課題について、ご執筆いただいています。

一方の研究誌『現代と親鸞』第8号では、研究論文のほか、「現代と親鸞の研究会」から文芸評論家の加藤典洋氏、作家の青木新門氏の問題提起と質疑。「現代における人間像に学ぶ研究会」から、ひまわりクリニック院長の森津純子氏、「英訳『教行信証』研究会」から元大谷大学教授の坂東性純氏の講義と質疑。また、「親鸞仏教センターのつどい」から社会評論家の片沢俊介氏と本多弘之所長の記念講演、さらに、本多弘之所長の問題提起(5講座分)を掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

『歎異抄』は、序と第十二条と第十五条で「易行」という言葉を三回使っている。「易行」の表層の意味は、「易しい行」という意味である。難しい行では、人間にとって普遍妥当性をもたない。「易行」だけが普遍妥当性をもつ。救いの普遍妥当性という面では、「易行」が「難行」を凌駕する。しかし、「易行」の深層の意味は、相対的な「難易」の「易」ではない。つまり、「簡易な努力」ではなく、「人間の努力をまったく必要としない」という意味である。ここまでくると、人間の側からは一切、手も足も出ない。人間が未解決の問題に出合ったときには、「いかにしたらよいか？」というハウツーの問い方しか出てこないからだ。実は、そのような問い方を撤回させる機能が「易行」なのである。「いかにして？」と問う以前に、すでに「人間」として生まれ、紛れもなく生きている事実があるからである。（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第十二条〉その2

原文

当時、専修念仏のひとと、聖道門のひと、諍論をくわだてて、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりなりというほどに、法敵もいできたり、謗法もおこる。これしかながら、みずから、わが法を破謗するにあらずや。たとい諸門こそりて、念仏はかいな

現代語訳

このごろ、専修念仏者と自認するひとと聖道門のひとが互いに議論を吹っかけて、「私の教えこそ優れている。あなたの教えは、劣っている」と、そのような表現をするから、教えの敵対者もあらわれ、また、仏法を損なう罪を犯すことになる。しかしこのような態度は、かえってみずから自分自身の仏法を破壊し、謗ることになるのではないか。たとえ、さまざまな仏教諸派の学者たちが、みな口をそろえて、「念仏は能力のないもののためのも

親鸞仏教センターの動き

(2005・3～5)

■2005年

- 3・1 「親鸞仏教センター通信」第13号を発行。
第13回研究会議（研究・交流・出版の協議と企画）。以降、8回の研究会議を開催。
- 3・11 第60回英訳「教行信証」研究会。以降、7回の研究会を開催。
- 3・14 第54回「聖典」の試訳「歎異抄」研究会。以降、6回の研究会を開催。
親鸞聖人ご命日のつどい
第30回清沢満之研究会。以降、4回の研究会を開催。
第36回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）。
- 4・1 櫻井智浩研究員が大谷大学非常勤講師に就任。
人事発令（高海史研究員、羽塚高照研究員）
- 4・6 現代と親鸞の研究会23「朝鮮史から見た日本」朝鮮史研究会会員・岡百合子氏（文京区・東京ガーデンパレス）
親鸞聖人ご命日のつどい
- 4・8 第3回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「老いと近代社会―市民がケアをタメにする―」生活とリハビリ研究所所長・三好春樹氏、「人間像と如来回向」親鸞仏教センター所長・本多弘之（親鸞仏教センター、文京区東大赤門隣・学士会分館）
親鸞聖人ご命日のつどい
- 5・13 第37回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
第60回「聖典」の試訳「歎異抄」研究会「宗教原語を現代語に翻訳する意義と諸問題」東京大学名誉教授・脇本平也氏（文京区・東京ガーデンパレス）
- 5・27 「聖典」第9号「現代と親鸞」第8号、「親鸞仏教センター通信」第14号を発行。
- 6・1

現代と親鸞の研究会・第15回

現代の闇を破りうるか

作家 青木新門



青木新門 氏

2004年 8 月30日、東京ガーデンパレス（文京区）において、作家の青木新門氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。

「納棺夫」と蔑まれながら、死者の姿や叔父の臨終の場をとおして、親鸞の教えに出遇われ、現場に立って五感で認識することの大切さを痛感しておられる青木氏に、「現代の闇を破りうるか」をテーマに語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ 光に遇う

挫折を繰り返した果てに、たまたま葬儀社に勤めはじめ、死体をお棺に納める仕事をするようになりました。ところが、そのとたんに親戚や世間から「納棺夫」と白い目でみられました。そんな追い詰められた日々のなかで、死者に導かれるように出遇ったのは親鸞の教えでした。

当初、私は納棺に行っても、死者を単なるモノとして見ていたのです。ところが、死ぬ直前のとても柔和な叔父の顔に出会ってから、死者に対して親近感を覚えるようになっていきました。それ以降、安らかな死者の顔を通して、死に対する恐怖感や死体に対する嫌悪感は、私の身体からなくなっていました。私は、生と死が限りなく近づいたとき、あるいは生きていながら死を100%受け入れたときに見えてくる世界こそがお浄土の世界ではないか、と考えるようになっていたのです。つまり、これが宗教で言

う「光」ではないかと思ひ、あらためて仏教書を読むようになりました。

特に、『教行信証』を読み始めて、「^{きやうのまき}教 卷」を読んだ瞬間に「^{こうげん ぎ}光顔巍巍」という言葉が出してきました。「^{ししきしやうじやう}姿色 清 淨」にして、光顔巍巍とましますこと」（『真宗聖典』152頁 東本願寺出版部）という言葉があります。この光顔巍巍という言葉にふれたとき、涙が出てきました。それは、叔父の顔や死者たちの顔とオーバーラップしたからです。親鸞は、それを『教行信証』の中心に据えておられることに驚きました。親鸞は『無量寿経』が真実だ、と言います。その理由は、^{あなん}阿難がその光に出遇ったということにあります。^{わさん}和讃に「^{ひつきやうえ}畢竟 依を帰 命 せよ」（『浄土和讃』同479頁）とあるように、それは「^{くし}遇斯 光」、つまり阿弥陀さんの光、仏性に遇うということです。

私は親鸞の「恩徳讃」（「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし」〈「正像末和讃」同505頁〉）が好きです。なぜかと言えば、「如来大悲」を私は遇斯光だと思っていますが、その光の恩徳だけで終らないで、「師主知識の恩徳」と言います。光に出遇っても、よき人に出遇わなかったら、光といえども間違っていくのです。ここがポイントです。七高僧を通じて、仏教が正しく伝えられた内容がかたちになったということはとても大事なことだと思います。だから、よき人に出遇わなければ、その光に直接出遇っても、自分のそのときの知識や能力でしか如来の言葉を伝えることはできないのです。

■ 人知を超える視点—現場に立つ—

光に遇うことは、現場に立って五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）で認識するということがなければできないことです。現代はそれがありません。

例えば、医療関係などでもそうですが、現場なしに「知」で考えているのではないのでしょうか。人知で“こうあるべきだ”と考えている場合は、どうしても現場とのズレと共に真実から離れていくのではないかと考えています。ここに、現代の深い闇を見ることができます。真実から離れないようにするためには、現場に立つということがとても大切です。特に、死ぬとか生きるということは、現場そのものだと思っています。遇斯光に遇うには回心しかなく、「回心」というのは、自力の心（じりき しん）をひるがえし、すつるをいうなり」（『唯信鈔文意』同552頁）で、その回心は、現場での実存的体験以外にないのです。

現代は、光顔巍巍とか不可思議光というスピリチュアリティ（霊性）の世界をあまりにも排除しているのではないのでしょうか。スピリチュアリティというのは実存的体験です。だから私は、現場に立つことがとても大事ではないかと考えています。私は、「横超（おうちよう）」も「還相回向（げんそう かいこう）」という言葉もそれまでさっぱりわかりませんでしたが、安らかな死者の顔と出合ってから読みますと、頷くことができました。「光」というのは、光に出遇った人に出会うということなのです。要するに、叔父の臨終の場に出合う。出合えば、阿弥陀さんが叔父と一体になっているから、その光に出遇えば、またこちら（こちら）も明るく（とも）燈る。燈るということは、自分にも電気が点くことだから、周りも明るくなるということです。これが「還相回向」であり、一瞬の間に点くわけだから「横超」ということなのです。こういうことは人知ではけっしてわからないのです。

本来、生老病死を人間のありのままの姿として見るのが仏教の原点だ、と思うのです。この「ありのまま」というのは非常に大事だと思

ます。

35歳の若さで亡くなった正岡子規が、死ぬ2日前まで書いた『病牀六尺（びようしょう ぶくろ）』のなかで、「悟りというのは、平気で死ぬることだと思っていたのが、そうではなくて平気で生きていることであつたのだ」（取意）と述べています。私たちは、常に生老病死の全部を抱えながら生きているわけです。しかも、仏教に出遇ったからといって、私の生活は何も変わらないわけです。でも、もし親鸞の教えに出遇っていなかったら、私はすべてを受け止めきれず、パニックになっていたと思うのです。そこが大事なところなのです。これが、平気で生きていることなのだという捉え方をしています。しかしそれは、光に出遇うということ、つまり阿弥陀さんと共にあるからできるのであって、自分の力ではけっしてできないのです。（文責：親鸞仏教センター）

※青木新門氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第8号（6月1日号）に掲載します。

青木 新門（あおき しんもん）作家

1937年、富山県生まれ。早稲田大学中退。冠婚葬祭会社（現オックス）に入社し、専務取締役を経て、監査役。著書に葬儀の現場での体験を著した『納棺夫日記』（文春文庫）、『木漏れ日の風景』、『転生回廊—聖地カラス巡礼—』（以上、北日本新聞社）、詩集『雪道』（桂書房）。共著に『「死」をめぐる三つの話』（大法輪閣）、『出会い・出逢い・出遇い』（自照社出版）など多数。『納棺夫日記』は、“Coffinman”（Buddhist Education Center）として英訳され、2005年1月には中国語訳も出版された。また、『アンジャリ』（親鸞仏教センター）第8号に「光と言葉」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」（文京区の「東京ガーデンパレス」で）

■ 朝日カルチャーセンターの「公開講座『歎異抄』を読む」(協力: 親鸞仏教センター) が開催される (4月28日)

去る4月28日、朝日カルチャーセンター(新宿区西新宿・新宿住友ビル48階)において、「公開講座『歎異抄』を読む」が開催され、参加者の熱心な聴講を得ました。講師には、親鸞仏教センターの本多弘之所長があたり、今回の「春の講座」は、4月28日、5月26日、6月30日のワンクール全3回の開催です。

関係者の話では、特に、朝日カルチャー(新宿)における仏教講座への関心は、定年を迎える60歳前後の男性を中心に、年々増加の傾向にあると言います。そこには、まさに現代日本のサラリーマン社会の苦悩を象徴する首都・東京で、もっとも精神的枯渇の激しい困難な問題状況を生きている人びとの、生き方を模索する人間像が浮かび上がってきます。と同時に、時代が変わっても変わることのない人間自身の苦悩を解放しようとする仏陀釈尊の教え、ひいては親鸞の思想に自らの問いをたずねてみたいという、宗教的要求が見て取れるようです。

次の「夏の講座」の日程は、8月18日、9月15日、9月29日の全3回です。お問い合わせとお申し込みは、朝日カルチャーセンター 新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル48階(TEL 03-3344-1945 担当: 米山)まで。



講座風景(新宿区・朝日カルチャーセンターで)

親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

— 今との出会い —

●新スタッフの紹介

は づ か た か て る
研究員 羽 塚 高 照

1975年生まれ。大谷大学大学院文学研究科博士課程満期退学(国際文化)。



「アンジャリ (anjali)」は、古代インドのサンスクリット語で「合掌」を意味します。

アンジャリの会
入会しませんか?

「アンジャリの会」(『anjali』個人購読) 入会のご案内

親鸞仏教センターでは、設立4周年を機に、「アンジャリの会」を発足しました。この会は、親鸞仏教に親しみ、共に学んでいこうとする人たちの会です。

『anjali』と名づけた当センターの情報誌は、人それぞれに思想・組織・世界・時代を生きるものが、お互いをつなぐ意味を問い直し、そして「合掌」し合えるような新たな「出会い」の場となることを願って刊行されたものです。

入会者には、情報誌『anjali』(年2回)、機関紙『親鸞仏教センター通信』(年4回)(=写真)、公開講座等の案内をご送付いたします。

ご親類、ご友人の方々などにも、どうぞお勧めください。

◆年会費

1,000円(2部以上をご希望の方は、1,000円×部数)

◆申し込みと問い合わせ

〒、住所、氏名、電話番号を明記のうえ、ハガキ、FAX、Eメールのいずれかで、下記までお申し込みください。お申し込みいただいた方には、振込用紙とともに、『anjali』『親鸞仏教センター通信』等をお送りいたします。

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T係

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

あ と が き

親鸞仏教センター研究員の櫻井智浩氏が、2005年4月1日付で、大谷大学講師(非常勤)に就任した。氏は、3年間、「英訳『教行信証』研究会」を担当し、鈴木大拙師の英訳『教行信証』を参照しつつ、英訳をととして『教行信証』の現代的表現を探究された。氏を含め、すでに退任の常勤研究員(田村晃徳氏、藤原正寿氏)は、当センター設立の第一期3年間の任期中、慣れない東京の地に赴任し、精力的に研究課題に取り組まれた。この多忙ななか、櫻井氏と田村氏は博士(文学)の学位授与、真宗大谷派擬撰(ぎこう)の授与を受けられ、藤原氏は擬講論文を書きあげられた。そして今春には、新たに研究員2名(高海史、羽塚高照)を迎え、二期目の研究員体制が整ったことである。いよいよ東京という場での新たな活動が始まるが、単にこれまでに培った内容で勝負しようということではなく、さまざまな問題や課題に取り組む「人」に本気でおいしようにと思えば、いつでも出会える可能性をもつ東京で、自らの研究課題を実存関心をもって、積極的に問い尋ね、発言し、ぶつかってほしいと願っている▼本紙前々号(第12号)で、首都四都県(埼玉・千葉・東京・神奈川)の大学数と学生数をあげ、「首都圏で、時代の風に直接ふれながら、大学に就学している真宗大谷派寺院の出身者や真宗門徒の学生が、親鸞仏教を基軸に何らかのかたちで相互交流のできる「つながり」が生まれないか、また、そのために、読者の皆さまに一人でも多くの首都圏在住の学生の方々をご紹介いただきたい」と述べた。そのようななか、東京在住の大学院生3名が中心となって、「日本仏教を学ぶ会」を立ち上げたので、ぜひ親鸞仏教センターとも研究交流を図りたい」と当センターのホームページを見て訪ねてくれた。その約半年後、親鸞仏教センターを会場に「日本仏教を学ぶ会」例会が開催された。参加者は、当センター研究員を含め、東京大学、東京学芸大学、慶應義塾大学、大正大学、浜松医科大学、埼玉学園大学、国学院大学、駒沢大学、龍谷大学等で仏教学や宗教学、英文学や国文学を専攻する宗派内外の大学院生、非常勤講師、専任講師など約20名。3名の研究発表と質疑の後、懇親会も催された。ロコミを通じて集ったメンバーは、今後、東京という地場を最大限に活用しながら、日本仏教研究をととして若い研究者間の交流ネットワークを専攻していると。まさに時機を得た活動に賛意を表したい▼やはり研究成果は、自らの言葉で発言することをおして、外の眼から鍛えられ、深められ、育てられていくことがある。研究課題が単に教理学や文献学に留まらない、常に、より実践的な教学として創造され、発信されるためには、対外(他流)試合の場が重要であると感じた。(長谷岡)